イネ科通信 30

コバンソウ・他（小穂の枝が対を形成しているもの）

コバンソウ

地中海地方の原産で、明治時代に観賞植物として渡来しました。現在はいたるところに野生化しています。コバンソウは特徴ある花穂をつけます。頴果（果実）が稔ってくると黄色を帯び、小判に見えます。ときには大群落を形成することがあります。
左の写真をみると稈（茎）は細く、そこから伸びている枝はさらに細くて長いものと短いものとが対になっていて、それぞれに小穂がぶら下がります。枝が細いので頴果（果実）は逆さになっています。そのため、包頴は小穂の最上部にきています。護頴は隙間なく重なり合い、背側に膨れます。花期は５～７月です。

メヒシバと**コメヒシバ**

左下の写真はメヒシバとコメヒシバです。右下写真は花序を接写したもので左にコメヒシバ右にメヒシバがあ

ります。両方から小穂を引っ張ると右上の写真のようになります。これらも長短の枝に頴果がついています。

ヤクナガイヌムギ　下左はヤクナガイヌムギの小穂が長短の枝に付いているのが数カ所か見られます。右下はヤクナガイヌムギが成熟して雄蕊の葯が見えています。（注）**イヌムギ**はヤクナガイヌムギと違い閉鎖花です。